都市と広場の形態学
―９回の海外都市広場調査からの考察―

芦川　智，金子友美，鶴田佳子

The Morphorogical Study about City and City Square
― The study from 9 times of Research of City Square in Oversea Area ―

Satoru ASHIKAWA,Tomomi KANEKO, Yoshiko TSURUTA

This report is the study about the main theme about city and city square which are derived from 9 times of Research of City Square in Oversea Area. Themes are the consept of city square, the consept of center in the city, the difference of situation in the city square at ordinary day and formal day , the relation among then city square and commercial area, the charictaristic performance of symbolic space about city square, the change of space about city square derived by the popularization of cars, the classification of city space and the management as the invisible system.

（１）はじめに

海外広場調査は今年で８年目を迎える。ヨーロッパを中心として，北アフリカ，トルコなどで実施し，調査した国は21カ国，都市の数は360都市，広場の数は589に及ぶ。回を重ねるに従って美しい広場の発見があり，新たな広場への出会いが調査を続ける原動力となってきた。調査領域が広がると，それだけ広場への出会いの機会も増え，新鮮な感激の連続となる。都市を訪れると，その都市を象徴するような広場があり，イメージを作り上げてくれる。広場が，都市の良さの重要な要素といえるような気がする。そこには，教会や市庁舎があり，人々の憩いの空間となっている場合が多い。そして，旅行者として都市を訪れたとき，広場を目指すとセンターゾーンに到着できるという，わかりやすい構成をとっていることも都市の作り方として通例となっている。ヨーロッパに限らず世界各地には，そのお国柄を示す広場がある。それ故，広場はヨーロッパの専売と言うわけではないし，その意味で，私たちの調査もヨーロッパを第１のステップとしたが，そこから各地域に拡大して企画してきた。

以下にこれまでの調査実施状況を示す。

第１回海外広場調査：東ヨーロッパ（ドイツ，ポーランド，チェコスロバキア，ハンガリー，ユーゴスラビア５カ国）を対象として平成２年９月初旬から25日間実施した。

第２回海外広場調査：東ヨーロッパ（ハンガリー，ルーマニア，ブルガリア，トルコ，ギリシャ，イタリアの６カ国）を対象として平成３年８月初旬から28日間実施した。

第３回海外広場調査：トルコ，ギリシャ２カ国を対象とし，実施は平成４年７月末から27日間である。

第４回海外広場調査：北欧とフランドルを中心としてドイツ，スイス，フランスを付加的に加え対象地域とし，実施は平成５年９月初旬から18日間である。

第５回海外広場調査：対象地域は，アラビア半島南端のイエメンとして実施は平成６年５月の13日間であるが，内線勃発のため調査は，平成７年５月に再度実施し，ほぼ当初の計画地区を調査することが出来た。

第６回海外広場調査：イタリア北部地域を対象として平成６年７月末から25日間実施した。

第７回海外広場調査：対象は，モロッコ，ポルトガル，スペインの３カ国で，実施は平成７年８月21日から28日間である。

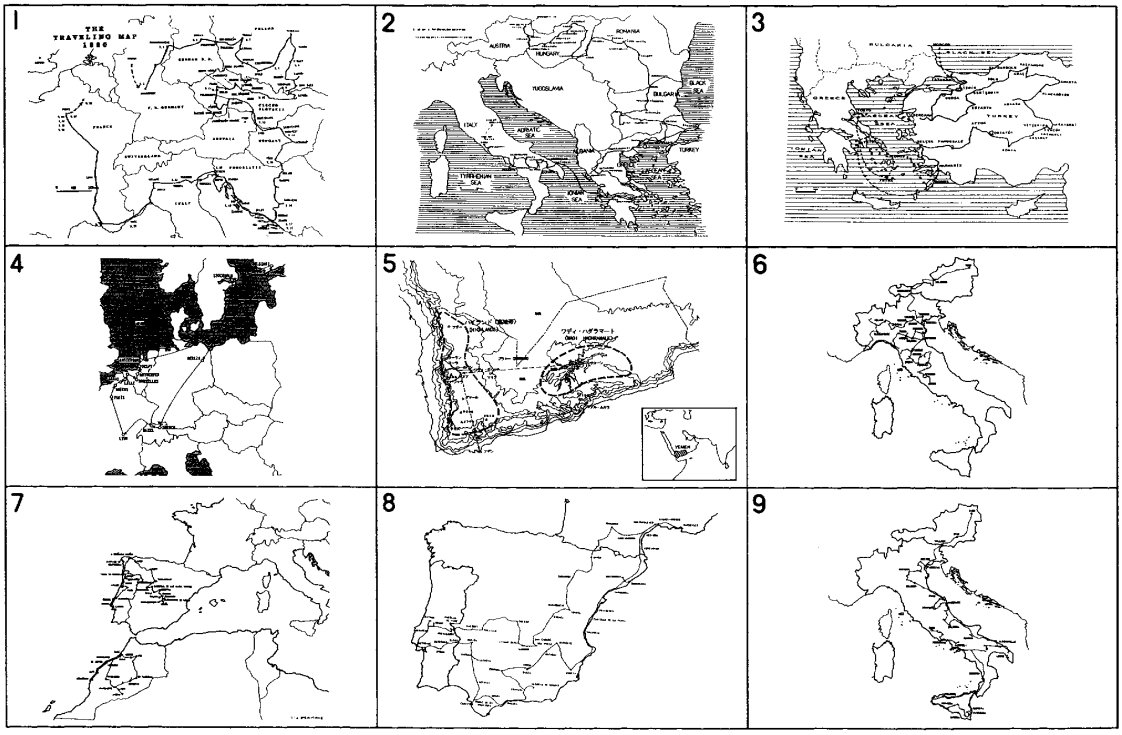
第８回海外都市広場調査：対象を南仏，スペイン，ポルトガルの３カ国で，実施は平成８年９月２日から24日間である。

第９回海外都市広場調査：第６回の北部イタリアと呼応する形で南部イタリアを対象としており，平成９年８月21日から25日間である。

表－１　調査データ

	調査を行った国名							調査国数	調査都市数	調査広場数
第1回	ドイツ	ポーランド	旧チェコスロバキア	ハンガリー	旧ユーゴスラビア	イタリア	フランス	7	55	45
第2回	オーストリア	ハンガリー	ルーマニア	ブルガリア	トルコ	ギリシャ	イタリア	7	36	74
第3回	トルコ	ギリシャ						2	21	29
第4回	フィンランド	スウェーデン	ドイツ	スイス	フランス	ベルギー	オランダ	7	15	38
第5回	イエメン							1	9	12
第6回	イタリア	オーストリア						2	62	112
第7回	モロッコ	ポルトガル	スペイン					3	39	69
第8回	スペイン	ポルトガル	フランス					3	51	90
第9回	イタリア	オーストリア						2	72	120
合計								21	360	589

図－１　調査行程図（９回分の調査）



これまでの海外都市広場調査を通して都市の広場というものがどのような位置づけを持ち，どのような概念の下に，どのように機能し，人々にどのように受け入れられているかを以下に順を追って考えていきたい。

（2）我が国の広場概念は

我が国にはヨーロッパに見られるような広場はないといわれている。では，広場に相当する空間が日本には見あたらないであろうか。日本の伝統空間の中には広場に相当する空間は，神社の境内や，参道あるいは，道路の辻として見られた。現代の都市空間に広場に相当する空間があるか否かを確かめるために，東京の情報誌をくまなく探してみた。その結果として判ったことは以下のごとくである。大都市東京の23区内で広場という文字がついた場所が43個しか発見できなかった。しかもそのほとんどはプレイロット的な小さな子供のための広場でしかなく，大きなものの大多数は，駅前広場の形式であった。日本人にとってはどうやら広場に親しみがないのか，使い慣れないのかいずれかではないだろうか。

横浜の新都心であるみなと未来21地区に計画されたいくつかの広場があるが，そのどれもあまり人がたむろしないか，何とはなしに端っこにいて，広場中央は閑散としている。日本人には使い慣れないのか，あるいは計画のされ方が悪いのか原因を明確にはできないが，現象として言えそうである。界隈空間は計画の対象になかなかならないといわれているが，歴史の中で育まれ，都市の市民が欲してできあがったもの，あるいは長い歴史過程の中から生まれた空間でないと定着しないということなのかもしれない。私たちにとっては，広場という概念についてまだまだ学び足りない部分があるのではないだろうか。

表－２　東京23区内の広場名称のついた空間のリスト

	地区	広場名	分類
1	渋谷	ﾊﾁ公前広場	b
2	新宿	水の広場(新宿センタービル)	d
3	新宿	都民広場（東京都庁）	d
4	新宿	芝生広場（新宿中央公園）	c
5	新宿	水の広場（新宿中央公園）	c
6	臨海	副都心広場	g
7	丸の内	皇居前広場	g
8	丸の内	動輪広場（駅地下）	a
9	秋葉原	秋葉原駅前広場	b
10	両国	江戸東京ひろば（江戸東京博物館）	d
11	上野	こども広場（上野公園）	c
12	下北沢	駅前広場	b
13	浜松町	お馬の広場（世界貿易ｾﾝﾀｰﾋﾞﾙ）	d
14	恵比寿	ｾﾝﾀｰ広場(ｶﾞｰﾃﾞﾝﾌﾟﾚｲｽ)	d
15	恵比寿	ｼｬﾄｰ広場(ｶﾞｰﾃﾞﾝﾌﾟﾚｲｽ)	d
16	恵比寿	時計広場(ｶﾞｰﾃﾞﾝﾌﾟﾚｲｽ)	d
17	八重洲	八重洲南口広場（駅）	a
18	浜松町	港区浜松町少年運動広場	e
19	日暮里	道ﾘﾝ広場	b
20	上野	春夏秋冬大連絡橋広場（駅３階）	a
21	上野	中央広場（駅）	a
22	新橋	ＳＬ広場	b
23	新宿	ｱﾙﾌﾟｽ広場（駅地下）	a
24	新宿	５５広場（新宿三井ビル）	d
25	浅草	にぎわい広場（リバーピア吾妻橋）	d
26	目黒	田道子供広場	f
27	高田馬場	疎林広場（都立戸山公園）	c
28	高田馬場	花の広場（都立戸山公園）	c
29	高田馬場	芝生広場（都立戸山公園）	c
30	高田馬場	ｼﾞｮｷﾞﾝｸﾞ広場（都立戸山公園）	c
31	高田馬場	やくどうの広場（都立戸山公園）	c
32	高田馬場	子供の広場（都立戸山公園）	c
33	高田馬場	いこいのひろば（都立戸山公園）	c
34	高田馬場	つどいの広場（都立戸山公園）	c
35	阿佐ヶ谷	南口広場	b
36	東京	いこいの広場（駅）	a
37	上野	電話の広場（駅）	a
38	上野	広小路広場（駅）	a
39	大手町	ｶﾙｶﾞﾓ広場（駅）	a
40	有楽町	ぽん太の広場（駅）	a
41	神宮前	ふれあい広場（駅）	a
42	浅草橋	ﾘﾌﾚｯｼｭ待ち合わせ広場（駅）	a

a. 駅・駅構内	12
b. 駅前	6
c. 公園内広場	11
d. 敷地内広場	9
e. スポーツ広場	1
f. playlots	1
g. その他	2
	42

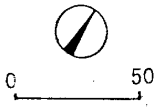
（「パブリックスペースの在り方に関する研究－東京２３区内広場調査－」須賀麻実子卒業論文 1998 より）

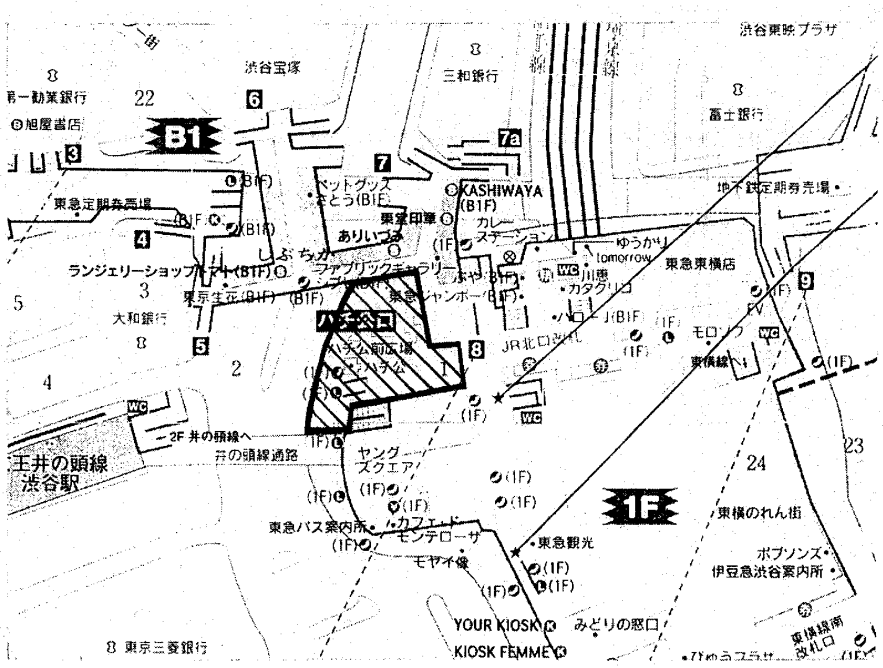
図－２～６：23区内の広場の代表的なもの

ＰＵＳ　２３区内広場データカード　　**広場ＮＯ．１**

広場名	ハチ公前広場	所在地	渋谷区道玄坂 1-1
広場に関するコメント		広場施設概要	銅像・植栽・ベンチ・案内板・公衆電話等
渋谷という繁華街の為、一日中人々が集まっている。それには、交通機関がＪＲ・東急・京王・営団地下鉄と多く乗り入れているという理由もあるであろう。直接広場には設置されていないが、周囲の建物の看板広告などは、そこに集まる若者の情報源となっている。		用途	待ち合せ・電車乗り換え・イベント等
		規模	小広場
		備考	渋谷駅西口

広場形態

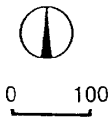


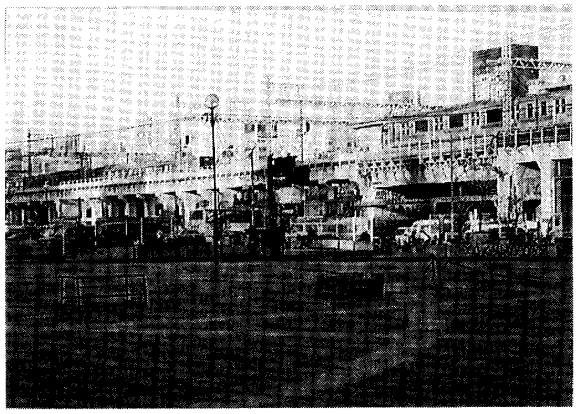


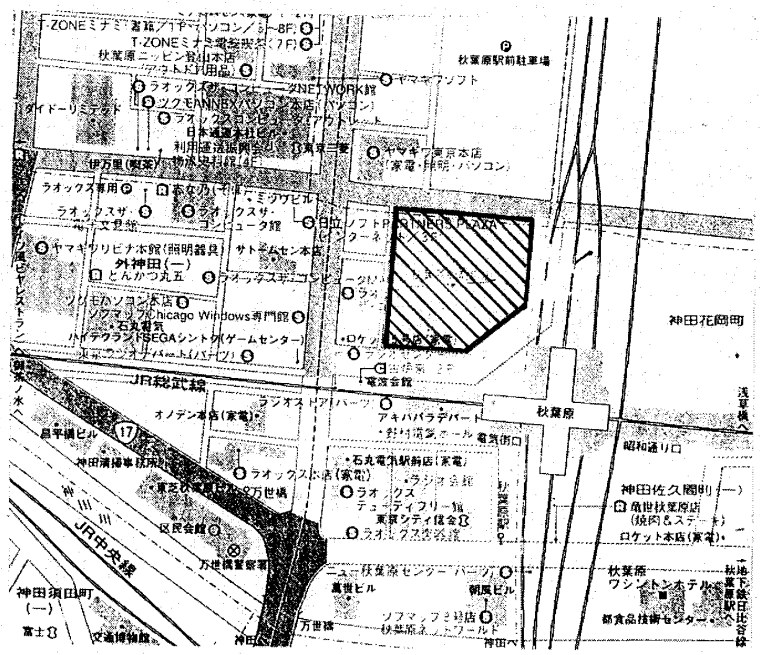
ＰＵＳ　２３区内広場データカード　　**広場ＮＯ．** 9

広場名	秋葉原駅前広場	**所在地**	千代田区外神田 1-18
広場に関するコメント		**広場施設概要**	植栽・トイレ・時計台・ベンチ・電灯・遊具・事務所等
事務所には、8 時～17 時まで管理人がおり、毎日千代田区が委託したトイレ清掃が入る。広場周囲を柵で囲い、夜間も開放しているが、周辺住民からの、騒音の苦情が多く発生しているようだ。昼間は、天気がよいと、近辺のＯＬなどが、昼食をとりに来る光景が見られる。また、夕方を過ぎると、バスケットボールなどをしに来る人の姿も見られる。		**用途**	スポーツ・イベント・憩い・情報交換等
		規模	大広場
		備考	秋葉原駅駅前

広場形態



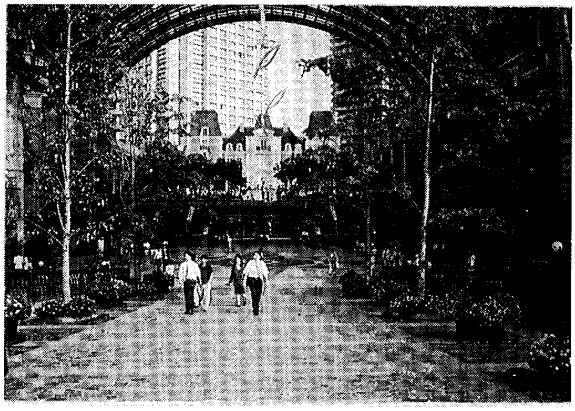


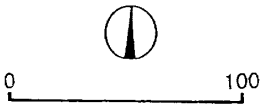


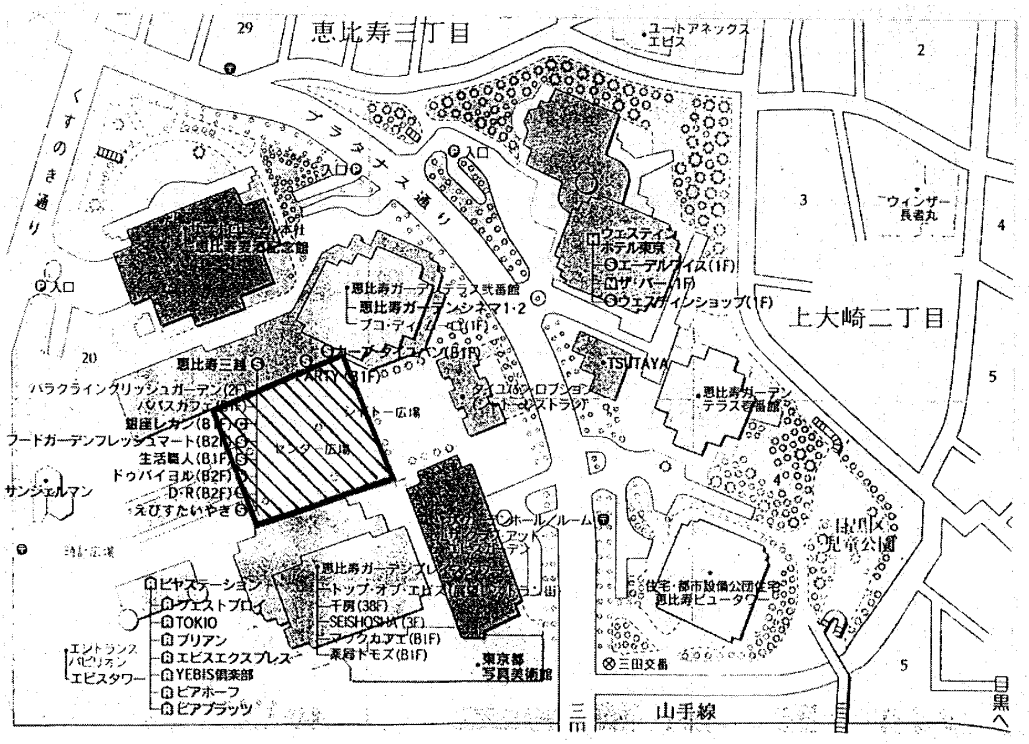
ＰＵＳ　２３区内広場データカード　　**広場ＮＯ．１４**

広場名	センター広場	所在地	渋, 恵比寿 4-20・目, 三田 1-4
広場に関するコメント		広場施設概要	植栽・ベンチ・施設・電灯・案内看板等
敷地内広場であり、恵比寿ガーデンプレイスの中心となる所である。広場上部がガラスのモールで覆われており、イベントやミニコンサート等が行われる。センター広場は、階段・スロープで、いろいろなレベル空間からアクセスできる。たくさんの人が集まり、周囲の施設を利用する人の通過点にもなっている。		用途	イベント・憩い・待ち合わせ・散歩等
		規模	小広場
		備考	恵比寿ガーデンプレイス内

広場形態



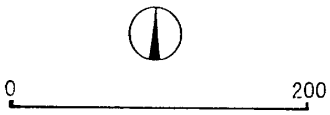


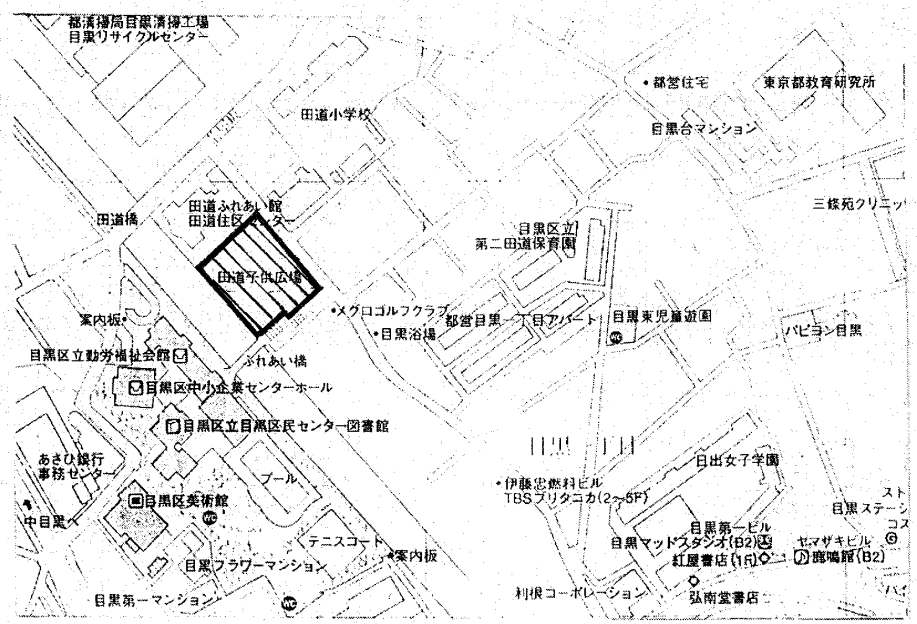


PUS 23区内広場データカード **広場NO. 26**

広場名	田道子供広場	所在地	目黒区目黒 1-25
広場に関するコメント		広場施設概要	植栽・ベンチ・照明・公衆便所
週末になると、朝から野球・サッカーチームが試合などをしている。柵で囲われている為、ボールを扱うことをしても、周囲への危険は少ないといえる。また、フリーマーケットのようなことも盛んに行われている。広場というよりも、むしろ playlots のような空間である。		用途	スポーツ・イベント・憩い等
		規模	小広場
		備考	

広場形態

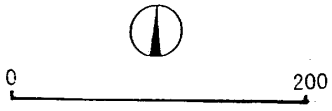


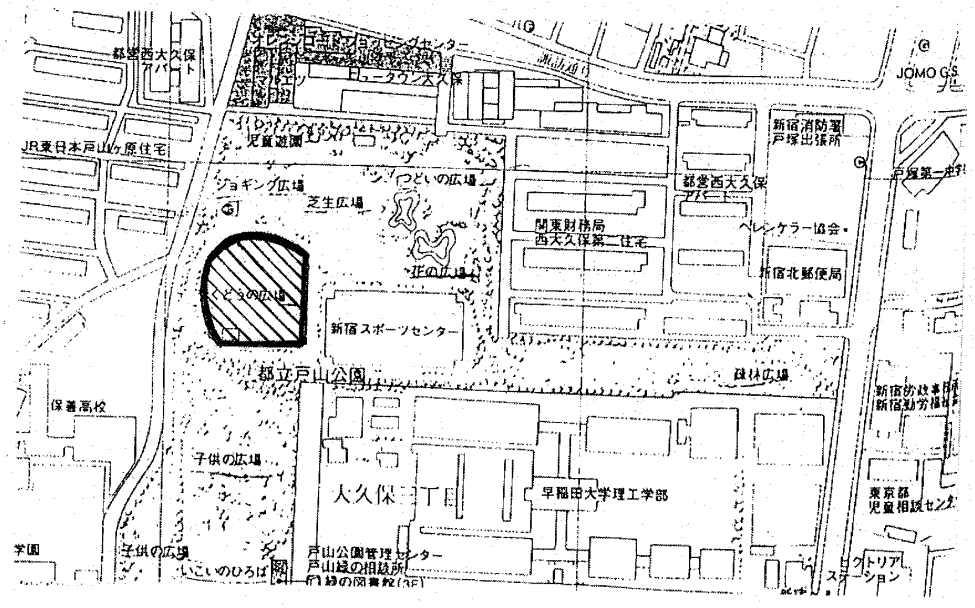


ＰＵＳ　２３区内広場データカード　　**広場ＮＯ．３１**

広場名	やくどうの広場	所在地	新宿区戸山２
広場に関するコメント		広場施設概要	植栽・ベンチ・水道等
都立戸山公園内で一番人が集まっていた広場であった。近くにある大学の学生が、バトミントンやボール遊びをしていたり、小学生の通学路の一部となっているようだ。広場の中心には大きな樹が一本あり、シンボルとして存在している。		用途	憩い・遊び等
		規模	中広場
		備考	都立戸山公園内

広場形態

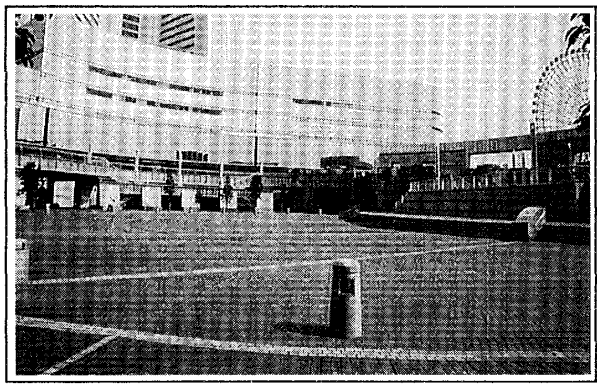




都市生活のセンターとして広場が存在することや，一見無駄のような広い空間を広場として計画することは，ヨーロッパの人たちには当たり前のことかもしれないが，日本人の私たちにとっては，まだまだ親しみのない不慣れな事あるいは無駄なことなのかもしれない。私たちの都市には，広場が見つからないで，むしろ通りの方が一般的なのである。歩行者天国の通り，商店街通り，向こう三軒両隣の横丁通りなどのように，よく見られる日常生活に密接な空間は通りのようである。日本人にとって人と人の適正距離はせいぜい５，６メートルがいいとことといわれる。ヨーロッパ人にとって，広場の様相を見ているとどうやら，距離は，日本人より遙かに巾が広く，５から20メートルあたりまで広がりがあるように感じる。もっとも，日本人よりも適正距離が短い人たちもいるようで，私の経験では，トルコ人は，人と人が話す距離は，50センチから離れても１メーターくらいかなと思えるほど近い距離である。このように人と人の距離という点からすると，広場の空間は必要がなく，通りで十分まかなわれるのではないだろうか。

大分前のことであるが，新宿の駅前の地下に西口広場が出来た頃のことである。新しい広場が出来たことで，これは若者にとって魅力的な空間であった。しかし，ビラ配りや，アジ演説，反政府的集会の場などに利用されるようになって，駅管理者は西口広場の名称を取り去り，この空間は西口通路ですと張り紙をしてしまった。今，この通路はホームレスの住みかと化しており別な問題が起きあがっている。建設当初から

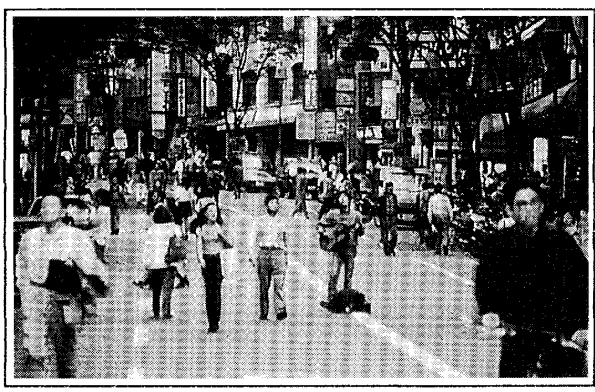
写真－１：横浜新都心の広場



パシフィコ横浜（横浜国際平和会議場）のプラザ

国際会議場とインターコンチネンタルホテルの両者の前庭としての広場であるが、人はあまりたむろしない。

写真－２：渋谷の歩行者天国



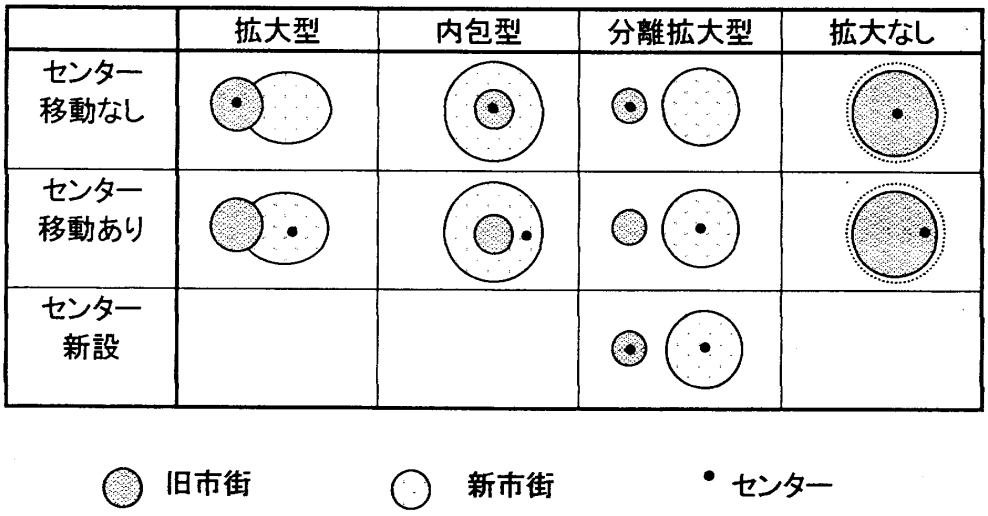
商業施設の集積した街路空間で時間設定・曜日設定で歩行者天国となる事例は我が国場合多くある。車道空間では、歩行者が自由に歩行できる他に自由なイベントあるいはパーフォーマンスに対応できる。

の西口広場が存続していたら，現在は別な状況になっていたかもしれない。私たちはもっともっと広場とは何かを考え，広場の使い方について学ばなければならないのではなかろうか。そこから，新しい広場空間が私たちの間で芽生えてくるかもしれないであろう。まずは，広場の本場の多様な姿を追っていくことが私たちの課題であろう。

(3) 都市のセンター概念としての広場

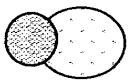
ヨーロッパの都市にアプローチすると，都市のセンターという標識に常にぶつかる。それを追っていくと市庁舎前広場や，教会前広場や，マルクト広場など，それぞれの都市の中心となる広場へと至る。そのセンターは，おおかた，中世以来の都市形成期の姿をとどめた旧市街の中央である場合が多い。その意味で考えれば，

図－7　都市形成のモデル図

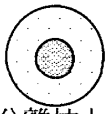


旧市街と新市街の相互関係の位置だけに注目すると、拡大型、内包型、分離拡大型、拡大なしの４つに分類することができる。

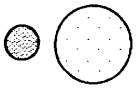
◆拡大型：　旧市街部分を部分的に新市街が内包する形態をとるが、新市街は旧市街の外側に大きく拡大して現在の都市が構成されている。



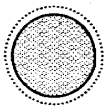
◆内包型：旧市街を新市街が包み込んで現在の都市が構成されている。



◆分離拡大型：旧市街から離れた所に新市街を形成し、現在の都市が構成されている。



◆拡大なし：現在に至るまで旧市街より外側への都市領域の拡大がない。



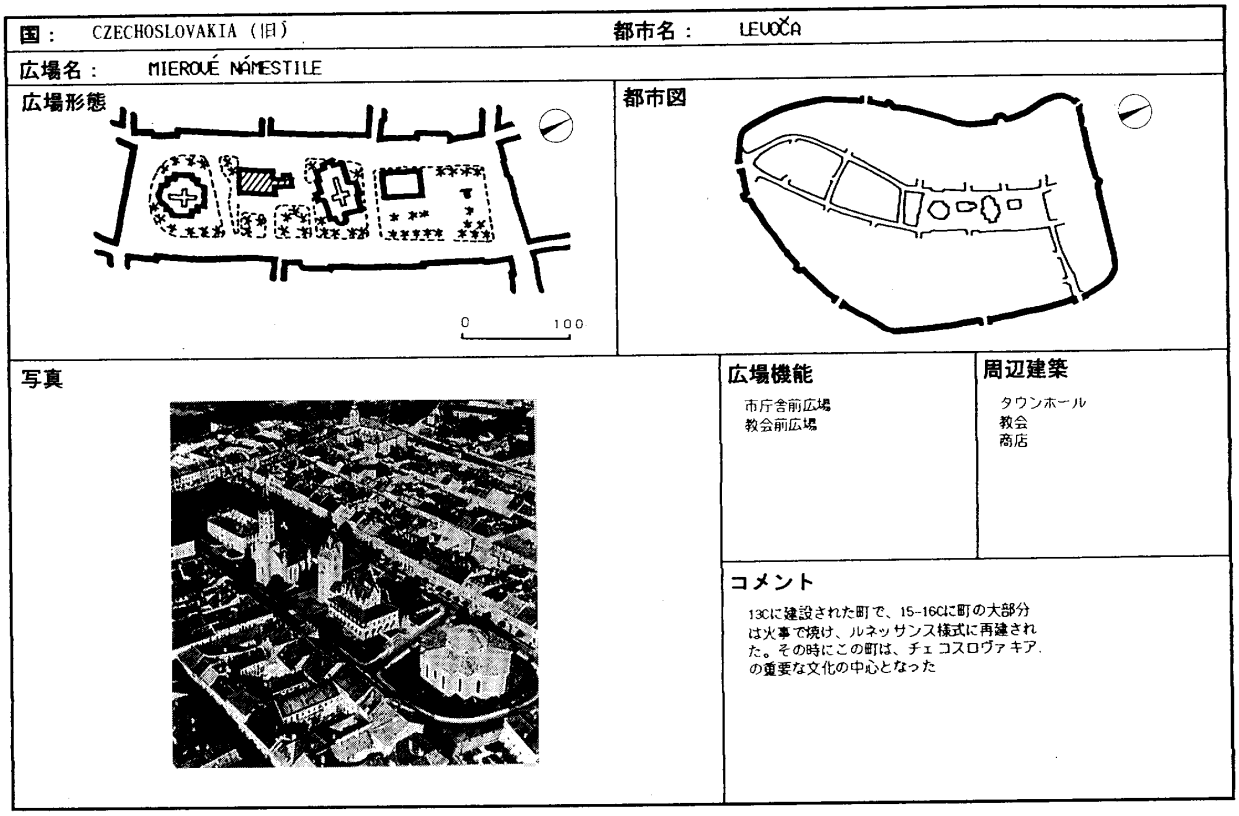
(「都市形態とセンターの構造に関する形態学的研究」1998 横田智美修士論文より)

このような都市は，センター概念が明快で，わかりやすい都市といえる。ヨーロッパの都市は，このようなセンターが明確に規定できるスタイルが多いのである。では，日本の都市はどうだろうか。まず標識として中心地区という標識がついているだろうか。このような標識は我が国では見られないものである。では，中心がないのであろうか。日本の場合は，駅前が中心的な機能を担っている場合が多いが，しかしそれがそのまま都市のセンター概念を担っているとは限らない。たとえば，新宿，渋谷，池袋，丸の内などは，東京の中心とはいえないが，それぞれが中心機能をもっており，いくつかのサブセンターの複合でできあがっているといえるのではないだろうか。そして，そこに広場があるかというと，せいぜい駅前広場的なものでしかなくセンター概念を担うような大規模な形態としては見あたらないのである。

都市のセンターが，都市形成期の形態を核にして造り上げられている場合がヨーロッパの場合は多いが，都市形成のモデルとして図－7に示されるタイプがある。

都市の中心が旧市街にある場合と，新市街へ移動していく場合とその類型は各種のタイプがあるが，一般に旧市街に比べて新市街の規模は大きくなるが，その場合，旧市街のスプロールとして拡大された場合と新しい都市概念による新市街形成と分かれる場合，前者は比較的旧市街の伝統的空間がセンターを担っている場合が多いが，後者の場合は，新市街部分に新しい核が形成される場合が多い。ヨーロッパの中世都市には前者の場合が多いが，イスラムの都市には，都市の近代化と同時に後者の形態への移行が見られるので，新市街に新しいセンターが出来，旧市街はその要素が変質していく場合が多い。

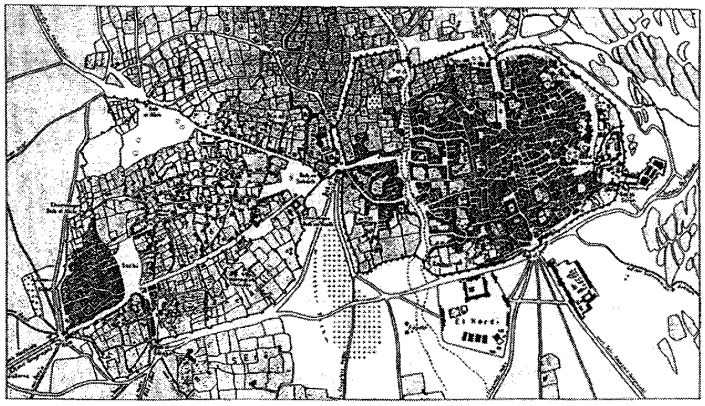
事例－1　中世のセンターが現在まで保存されている場合：レボチャ



事例－２　イスラムの旧市街の変質と新しいセンターの形成：サヌア

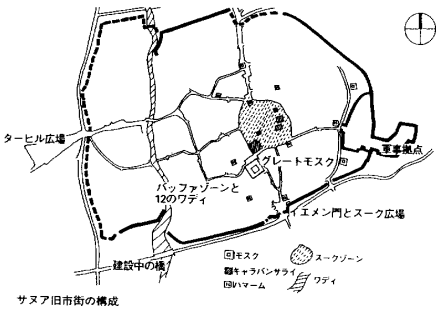
１９６２年のサヌアの都市図

旧市街は東側がセンター地区となり、グレートモスクと城塞部分が東端に立地している。



現在のサヌアの旧市街とセンター地区

現在のサヌアの中心はターヒル広場となっており、行政施設等が立地している



サヌア旧市街の構成

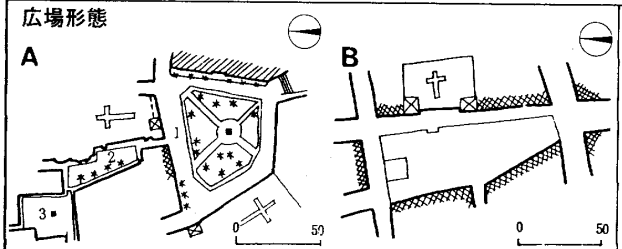
これに対して，旧市街と異なる新しい都市領域が形成され，別個の都市を造り上げ，それぞれにセンターとなる部分を造り上げていく場合は特殊のタイプといえるかもしれない。その例として，シチリアのラグーサとラグーサ・イブラ。あるいは南フランスのカルカッソンヌ，スペインのロンダ等が挙げられる。

事例－３　都市が新旧それぞれにセンターを保持しながら：ロンダ

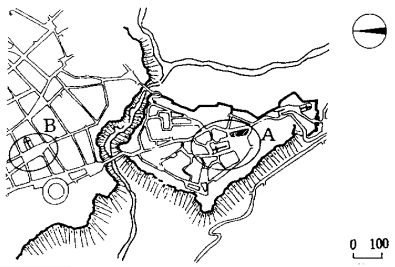
国： SPAIN　　**都市名：** RONDA

広場名： **A** 1) PLAZA DUQUESA DE PARCENT　2) PLAZA PEDRO PÉREZ CLOTET　**B** PLAZA DEL SOCORRO

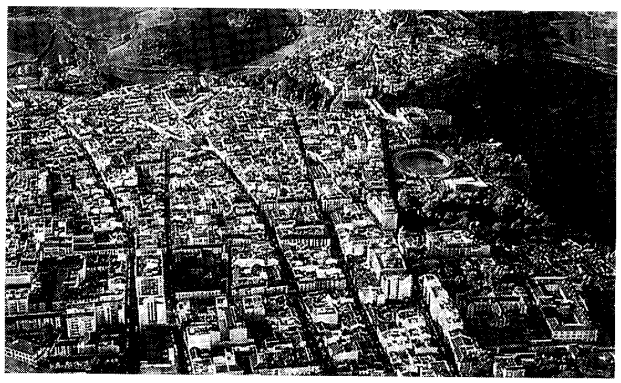
広場形態



都市図



写真



広場機能

A
教会前広場
市庁舎前広場
憩いの広場
駐車場
教会横広場

B
教会前広場
憩いの広場

周辺建築

A
聖母教会
市庁舎
IGLESIA Y CONVENTO DE LA CARIDAD
（教会と修道院）
他
十字架のモニュメント

B
IGLESIA DE NUESTRA SEÑORA DEL SOCORRO
（教会）
商業施設
地下駐車場

コメント

A
城壁のなかの旧市街には1485年まで続いたムデハル支配の名残が見られ、その小路や家々の白い壁面、バルコニーの格子などが風情を醸し出す。広場には、15世紀から16世紀にかけてマスリの跡地に建てられた聖母教会（外の二重に並んだペディメントは高位高官のための階上席として使われていた）、市庁舎があり修道院が面する中央には緑豊かな公園がある。

B
ロンダは、ロンダ山脈の縁、ペドロセロ川がえぐった「峡谷」とよばれる深くて峡谷の切り立った台地にある。この峡谷が、狭い旧市街（ラ・ロンダ）と新市街としてのびた（ムラジェーラ）とに町を２分している。新市街に1785年に建設されたスペイン最古に属するという闘牛場から、100m位離れた所にプエルタ広場はある。教会が面し、レストランやカフェが取り囲み、地下に駐車場がある。ベンチがおかれ、町の人々や観光客の憩いの場となっている。

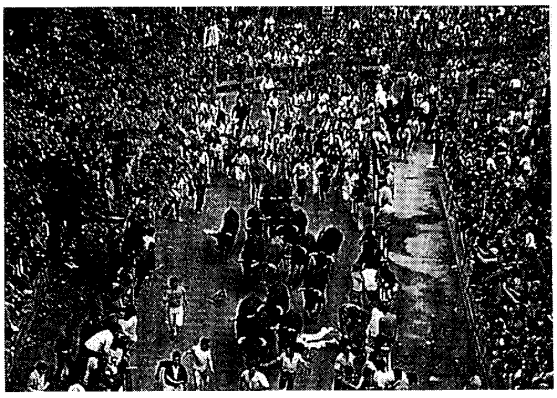
都市のセンターに何が配置されているかは，多様である。宗教施設の場合もあるし，行政施設の場合もあり，あるいは商業施設の場合もある。日本の場合は，鉄道の駅に付随して都市が発展した経緯もあり，交通施設的なものを核として出来た場合もある。施設がある場合そこに広場が付加される事が多く，その意味でセンターの一要素として広場が形成されてきたのである。

（4）都市に於ける晴れの空間と褻の空間

イタリアのシエナのカンポ広場では，パリオ祭が，スペインのマドリッドのマヨール広場では，野外オペラが，ベネティアのサンマルコ広場では，仮面をかぶるカルネバーレのお祭りが開かれ，スペインのマヨール広場では，闘牛の祭りが行われるように，広場は祭りの場でもある。祝祭を好むヨーロッパの人々は，年に数回の祭りのために広場を作ったというと言い過ぎであるかもしれないが，祝祭を重要な行事ととらえ，そのために空間を作り上げ，その準備として日常の生活を行っていくとするならば，まさにヨーロッパの都市は，祝祭人の都市といえるのではないだろうか。つまり，都市の晴れの場の空間として都市広場を用意したのである。それに対して，我が国の都市の様相からするならば，日常の生活を入れる界隈空間とか，通り空間などが構成の中心とり，日常生活人の都市として対比できるかもしれない。都市の広場が晴れの空間として機能した事例は挙げるに事欠かない。

宗教が都市の形態を決めている，あるいは，宗教施設が都市のセンターゾーンの重要な要素となることは，キリスト教文化圏に限らずいえることであろう。特にキリスト教の場合，ロマネスク時代に，教会はまだ都市に降りてきてい

写真－3，4，5　晴れの空間の事例各種（祭り，行政，記念日，革命，行事その他）

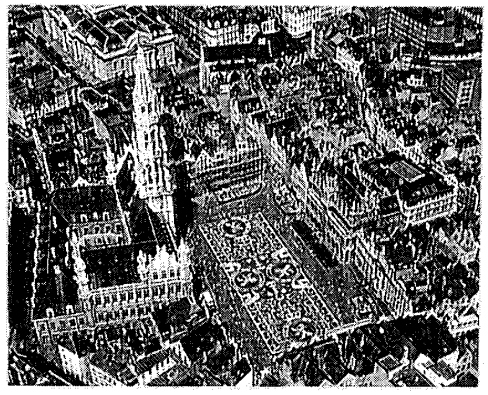


パンプローナ（スペイン）の牛追い祭

スペイン北東部のパンプローナでは年に1回町中の空間が祭りに一色となる。中央の広場から街路空間を含んで牛追いの行事が繰り広げられる。

革命の場となった広場：プラハのバーツラフ広場

1989年の革命時に広場は集会の場と化し、人々で埋め尽くされた。この広場は革命の記念碑として国民に語り継がれるであろう。



花のじゅうたんのｲﾍﾞﾝﾄ：ブリュッセル
２年ごとに開かれる一大ｲﾍﾞﾝﾄで世界中の人に知られている。広場の床を埋め尽くす花がじゅうたん模様を織りなしている。

ないが，ゴシック期代になると，都市生活の中心に教会があって生活の中心に教会があることに疑問を持つ人がいなくなった時代でもある。その意味で，教会前広場が，センターとなっている都市は多い。教会としての施設の存在は，日常的なミサが行われる場でもあるが，復活祭のような祭りと組み合わされた晴れの場としても位置づけられるために，教会施設は晴れの場につながると同時に，日常的な褻の空間としても意味を持つものである。また，都市の経済基盤を確保するために市場を重要視して都市センターに配置する例も同じように存在している。市の広場についても宗教施設と同じように日常的な場であると同時に晴れの空間とも関連する場となっている。つまり，年に数回の大規模な市は商業人にとっては晴れの場でもあるからである。

写真－６，７　晴れの場としての市場空間

ヴィチェンツァのシニョーリ広場
日常的にはバシリカの周囲に広がる憩いの広場として、多くの観光客が集まる場である。

シニョーリ広場が市場に変身した姿
定期市の時には広場はテントでうめつくされ、各地の産物や日常品の市場広場となる。

（5）商業空間と広場

商業機能は都市生活に於いて欠かすことのできない，広場の重要な機能の1つである。都市の活動の中での商業活動は生活の基盤的条件となるから当然の条件であろう。そして，商業空間は都市生活の中で華やかな演出空間としてあることも確かであり，都市のセンター機能の中での重要な要素でもある。そのため，広場空間と結びついてセンター機能をになう例は多い。その代表的なものとして広場が市場を目的として作られている事例がある。ドイツのマルクトプラッツ（市場広場）や，ポーランドのスタリー・リネック（市場広場）などのように広場名称が市場広場となっているものが典型であろう。また，広場を中心として周囲に商業ゾーンが広がっていく事例は，トルコやモロッコのイスラム都市によく見受けられる。そして，商業空間には，日常的な商業活動と，非日常的な活動とがあり，後者の場合特にイベント化していく事例も見受けられる。この場合広場全体が一大商業施設と化す場合が多く，晴れの空間としての広場の形態を示す。この場合，広場を中心として，それに連続している道路空間にも広がり，さらには都市全体まで商業活動が広がっていく事例も見られる。このように商業空間は都市のセンター機能の中で重要な位置づけがあるために日常・非日常を問わず商業空間と広場は一体的に考えていかなければならない対象であろう。広場と商業空間の関係をタイプ分けすると以下のようになる。

Aタイプ：広場に面して商業施設が建ち並び，日常的に商業広場としての役割を果たすタイプ

Bタイプ：広場全体が非日常的に一大商業空間と変化するタイプ

Cタイプ：A，B両者の形態を兼ね備えている場合であり，日常的には商業空間が周囲を囲む広場であり，非日常的に広場を仮設的な市が埋め尽くすようなタイプ

Dタイプ：商業施設そのものが広場の役割を果たし多機能な都市空間を構成しているタイプ

Eタイプ：広場外周部分に商業施設が囲うだけでなく広場内にも商業関係の施設が設置されているタイプ

Fタイプ：広場を囲む外周部分にアーケード等が配置され商業機能を果たし，広場を中心としてそれに隣接する地区まで商業施設がはりついているタイプ

Gタイプ：広場に日常的に市が立ち，広場そのものが市場空間になるタイプ

以上が広場と関連する商業空間のタイプである。そして，商業空間自体にはその形状として面的に広がるタイプと線的に延びて連続していくタイプとがある。また，商業施設として屋根で覆われたタイプと屋根はなく仮設的にテント等で一時的に覆うタイプとに分かれるが，この形態別に整理すると以下のようになる。

1. 屋根のあるもの

◆面的：イスラム都市に一般的な屋根付きのバザール空間のタイプ

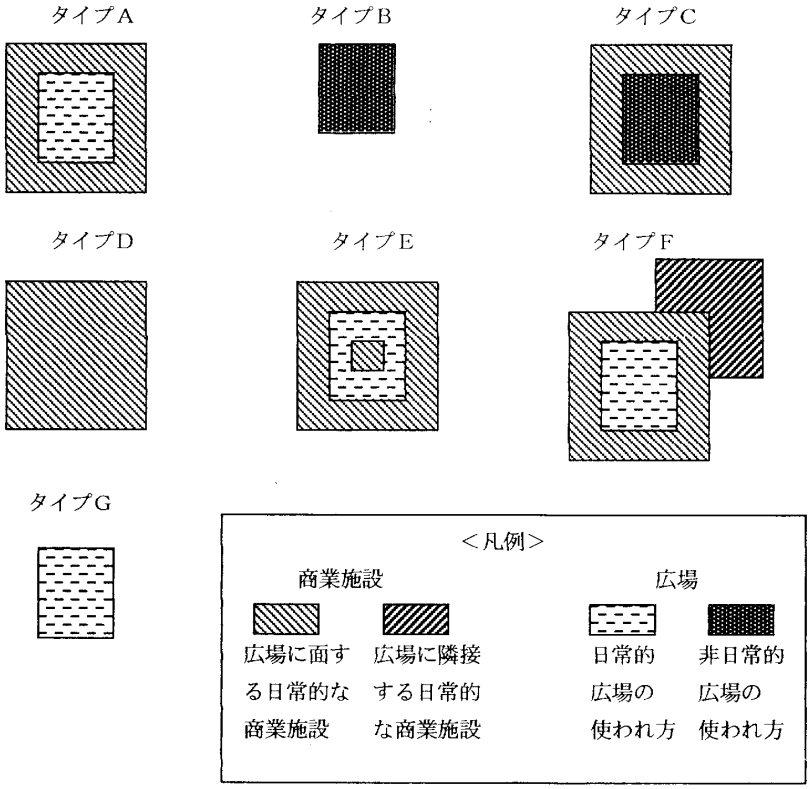
◆線的：街路沿いに商業施設が並びアーケード等で覆われた空間のタイプ

2. 屋根のないもの

◆面的：オープンスペースとしてある空間を市場広場として活用していくタイプ

◆線的：通常の商業施設のはりついた街路と，ある期間だけ露店等が並び線的な商業空間に変わる場合の両者のタイプ

図－8　商業空間と広場の配列モデル図

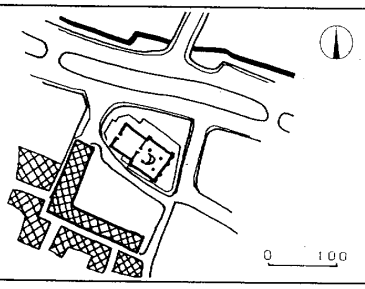


事例－4　イスタンブル（トルコ）　エジプト市場前

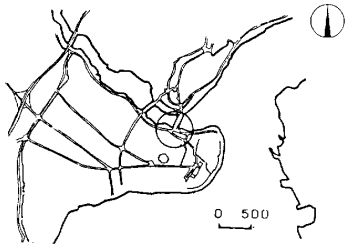
国： TURKEY　　**都市名：** İSTANBUL

広場名： EMİNÖNÜ MEYDANI

広場形態



都市図



写真

広場機能

市場広場
商業広場
モスク前広場
交通広場

周辺建築

エジプト市場
イエニ・ジャミイ
商業施設
船着き場
ガラタ橋

コメント

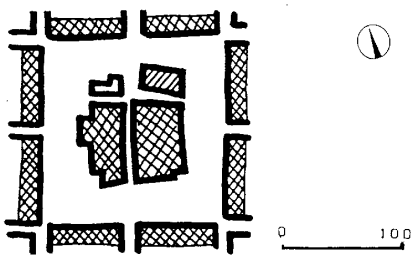
イエニ・ジャミイを中心とする複合施設である。L字型のエジプト市場では香辛料をはじめ、乾物や生活雑貨といったものが売られている。バスターミナルや船着き場があるため常に多くの人が行き交っている。広場には露天商の姿も多い。ここを中心にグランドバザールに至るまで、一大商業地域が形成され、ここからいくつもの通りが延び、商店以外に問屋街や倉庫、作業場になっている施設も多く並ぶ。

事例－5　ポズナニ（ポーランド）

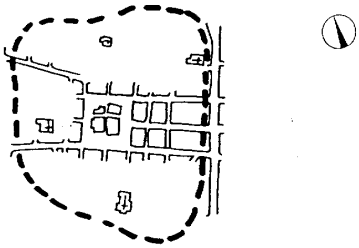
国： POLAND　　**都市名：** POZNAŃ

広場名： STARY RYNEK

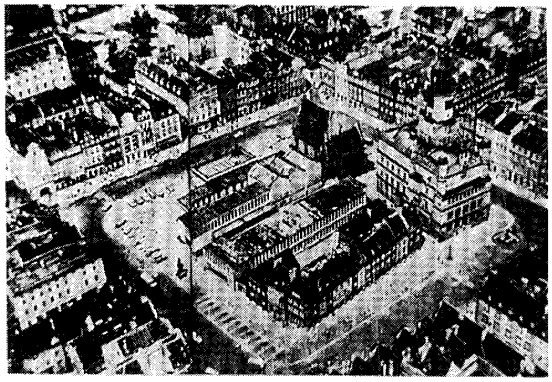
広場形態



都市図



写真



広場機能

市庁舎前広場
商業広場

周辺建築

タウンホール
商店

コメント

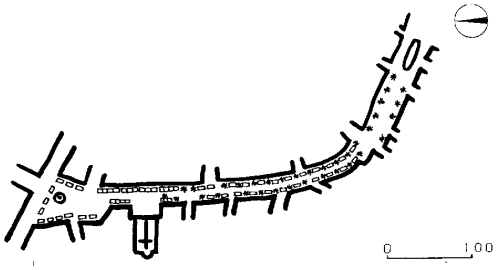
ルネッサンス様式のタウンホールは16Cに建設された
広場隣りに15Cの教会がある

事例－6　レッジョ・ネル・エミリア（イタリア）

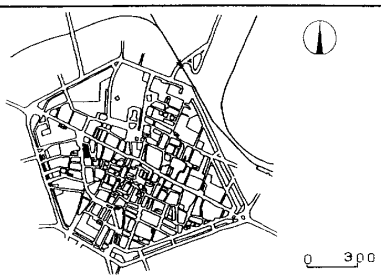
国： ITALY　　**都市名：** REGGIO NELL EMILIA

広場名： CORSO GARIBALDI　　PIAZZA V. GIOBERTI

広場形態



都市図



写真

広場機能

市場広場
県庁舎前広場
教会前広場
通り広場
商業広場

周辺建築

ﾏﾄﾞﾝﾅ･ﾃﾞﾗ･ｸﾞﾗﾂｨｱ教会
県庁舎
露店
商業施設
ｵﾍﾟﾗｽﾀｼﾞｵ

コメント

ｴﾐﾘｱ街道沿いにある工業、商業の中心地であるﾚｯｼﾞｮ･ﾈﾙ･ｴﾐﾘｱは、6角形の市街を形成している。V. GIOBERTI広場からのびるｶﾞﾘﾊﾞﾙﾃﾞｨ通りは毎年夏に、一定期間市が立っているらしい。私達が訪れたときも歩行者天国となり、道の両脇に様々な種類の露店が隙間なく並び、たくさんの人で賑わっていた。

(6) 広場のシンボル性

都市の広場は，都市のセンター概念と関連することは前に述べたが，その都市の顔としての意味を担っているのが広場であるとするならば，都市自体のシンボル性に関わってくる要素といえる。広場がその都市を象徴的に示すとはどのようなことによって行われるかの定式はない。そこで，シンボル性について広場をいかに囲うかという条件と，広場の装飾要素としてのランドマークの位置づけによっていくつかのタイプを導入することを試みる。

6－1「囲う」と「囲われる」要素

広場とは，道路空間の部分空間であり，一つのまとまりのある空間として切りとる事が出来たときに広場空間として認知され，名称づけられてそれが一つのイメージを造り上げる。このように広場が規定されたときに，それがくぎられた空間であるならば，何らかの意味で囲い込む要素があるのが通例である。取り出された広場空間を対象としたときに，囲う要素と囲われる要素に分解して検討する事は，広場の性格を明確にする意味で有効であろう。囲うという行為は囲われる部分があり，それがあるまとまった部分を構成する前提となるであろう。また，囲うという行為を特別に他と区別するためには，囲い込む必然性として囲い込む要素が他と異なっている事が多いのではないであろうか。つまり，その部分が飾られているなど，他と異なった要素があるはずである。そこで，今までの経験を基にして囲われるための条件とその形態，および囲う形態を整理してみると以下のようになる。ただし，囲われる要素の中で，最も多いのはオープンスペースとしての空間となるが，ここでは囲われる物的な要素がないとし，囲われる要素を構築物として存在する要素として捉える事とする。

囲う要素：アーケード，ゲーブル屋根，装飾的窓，建物の連続壁面等

囲われる要素：塔，教会，彫像，泉，市庁舎，記念碑等

空間の出来方として，囲う要素と囲われる要素のいずれを主体に考えているかその事例によって異なるであろう。例えば，パリのボージュ広場は，囲う要素を主体に計画しているが，ベルリンのヨーロッパセンター広場は廃虚としてのカイザーウィルヘルム記念教会が中心にあり，これを主体として広場が構成されている。また，アラスの英雄広場は，市庁舎を主体として構成されている。そこで，まず囲いが主体として広場が出来た，あるいは囲いを計画的に構成した結果広場が出来たものと，囲いは結果としてあり，むしろ囲われる部分が始めにあって，周囲の囲いは付随的に構成されてきたものに大きく分け，前者を計画的囲いと称し，後者を非計画的囲いと称する事とする。

もう一つの区別する要素として，囲われる部分に建物などの要素があるものと，オープンスペースとしての空間のみがある場合とは，広場の性格が全く異なってくる。そこで，上記の計画的・非計画的囲いをさらに区分し，囲われる部分に構築物がある場合とそうでない場合に分ける。以上によって，4つの区分で構成される尺度が出来たわけである。

6－2広場の装飾とランドマーク

囲いと囲われるものとの対比は，また，どの様に装飾化されているかにもよる。他の空間から広場の空間を分けて抽出する条件として，装飾されているか否かは重要である。一般的に塔を建てる事は，広場の位置を示すのに有効である。しかし中世期には，もっと別の目的があった。つまり，街から外を監視する望楼の役目をしていた。それが，今日では，ランドマークとしての役割を持っている。ランドマークはその広場の特徴を示すのに有効であると同時に，道

路空間から限定されて抽出する広場空間を意味づけるために重要な要素となるであろう。もちろんランドマークとしての要素は塔に限らず多様な施設が位置づけられる。特徴的な建物，あるいは，特殊な施設あるいは，連続的な構成要素としてのポルティコなど，多彩である。このランドマーク自体が広場のイメージを作り，都市のイメージ要素として意味を持つようになるのである。

ここでは，ランドマークが広場に対してどの位置にあるかで空間の色合いが異なる事をポイントと考え，タイポロジーを考える上での一つの要素として類型化を行う尺度の一つと考えていく。

6－3タイポロジー

広場のタイポロジーを次の3つの要素で組む。

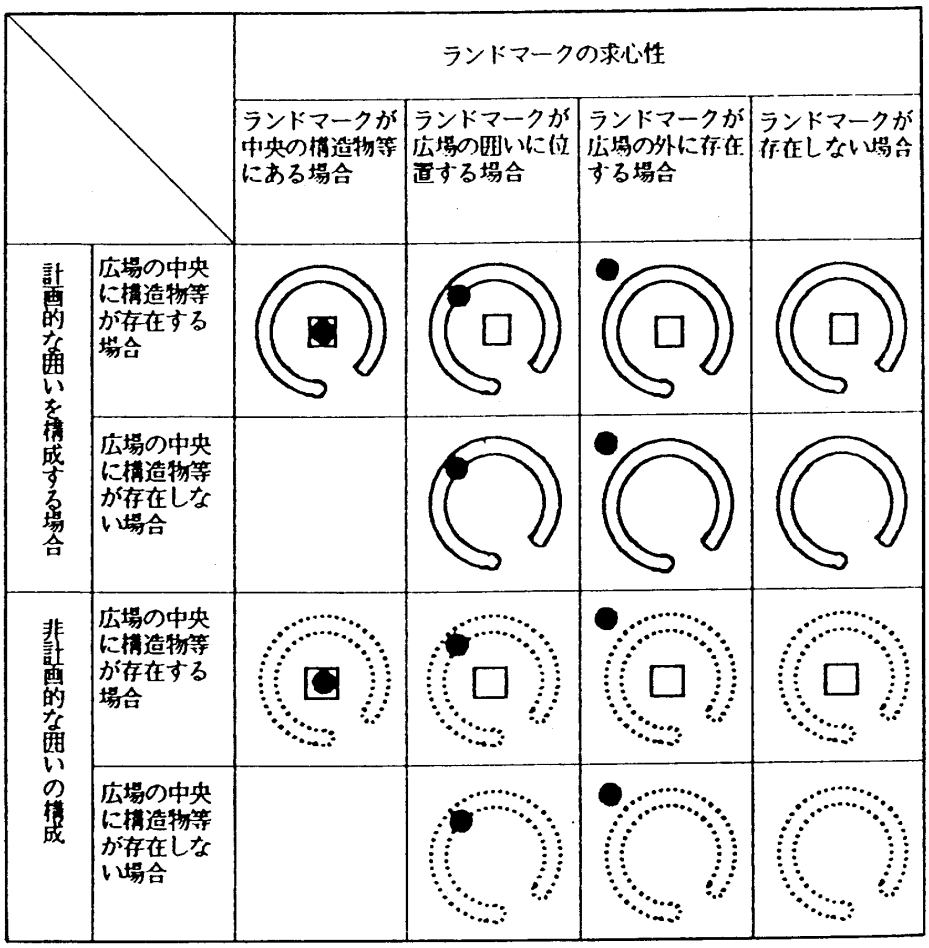
①広場を囲う要素が計画的であるかないか

②囲われる要素として，構築物（建築，彫像等）が存在するか否か

③ランドマークが広場のどの位置に存在しているか

以上の3つの要素により全体を表現したものが下図の16通りのタイプとして示される。

図－9　広場のタイポロジー



（7）車社会がどのように都市広場を変質させたか

さて，中世を起源とするヨーロッパの広場も，車の出現によって大きく転換を迫られた。つまり，車が出現してから１世紀足らずであるが，そのあいだに都市は人中心から車中心に変わり，それまでの人の領域の大部分は車に占領されてしまった。ヨーロッパの都市広場の場合は道路の延長としてあるために，一時車の駐車場と化したところもあったが，都市計画の手法によって車の領域を排除する都市核の発想や，広場下に地下駐車場をつくることによって再び人間の権利を復活することができたところも多くある。通り中心の都市づくりがなされてきた我が国にとって，車が通りを占領してしまってから，人の行き場所が無くなってしまった。歩行者天国のように一時的に車から解放された空間を計画的に作ることはなされてきたが，都市形成の歴史から広がりのある公的空間がないという都市構造のために人の空間は車の空間にこっそりと添わせるなどの措置で，ようやっと人間の空間が確保される状況が一般的である。

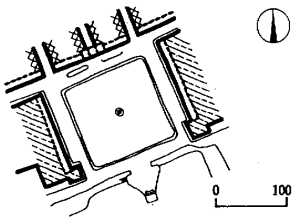
しかし，広場の伝統のある国に比べるとなかなか良好な人間の空間ができないということが徐々にわかってきたのである。そこで，人が憩うための空間を，たとえば広場として確保しようとしたときに，もはや道路にはその余裕が無く，致し方なく敷地の中でパブリックスペースを確保する以外無くなってしまったのである。新しい建築あるいは群としての建築の計画事例で，１階の道路に付属した部分にだれでも入っていける市民に開放されたパブリックスペースを計画していく事例が増えてきたのも，道路が車に占領されてしまった解消としてあるのかもしれない。このような事例は，我が国の場合各地で試みられている。

事例－７　広場が駐車場化している

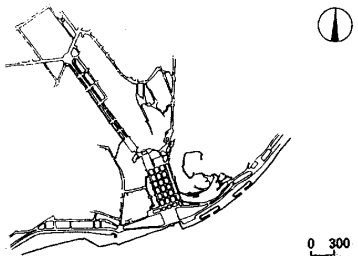
国： PORTUGAL　　**都市名：** LISBOA

広場名： PRACA DO COMÉRCIO　(TERREIRO DO PAÇO)

広場形態



都市図



写真

広場機能

行政広場
交通広場
駐車場

周辺建築

郵便省
海軍省
ドン・ジョセ１世の銅像
凱旋門
路面電車

コメント

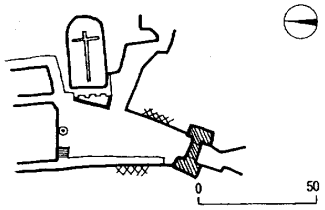
開放的でたいへん美しい広場。昔、大地震によってマヌエル１世の宮殿が破壊されたことから市民には「宮殿の広場」と呼ばれている。テージョ川を見晴らす正面は１９世紀のバロック様式の凱旋門で、後の２面は伝統的な高いポルティコを持つ行政の省がたっている。外壁は黄色に塗られ、中央にはドン・ジョセ１世の銅像が立つ。広場は駐車場になっていて、路面電車が通る。

事例－８　広場内に人と車の領域が混在している事例

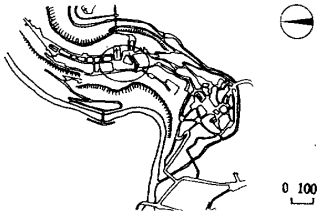
国： SPAIN　　**都市名：** CUENCA

広場名： PLAZA MAYOR　(PLAZA MAYOR DE PIO XII)

広場形態



都市図



写真

広場機能

教会(大聖堂)前広場
市庁舎前広場
駐車場

周辺建築

大聖堂
市庁舎
教区博物館
商業施設
バス停
水場

コメント

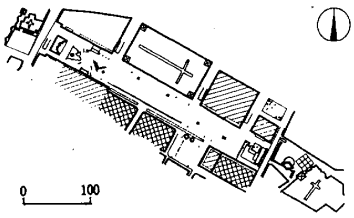
市庁舎のｱｰﾁを抜けると大聖堂のある中央広場に出る。入って右手にはｶﾌｪやﾊﾞｰﾙが並び、左側は駐車場になっている。その向こうに見えるﾌｧｻｰﾄﾞは広場より一段下がったﾚﾍﾞﾙに建っている住宅である。大聖堂のﾌｧｻｰﾄﾞは今世紀初頭に再建されたものだが、後部はｺﾞｼｯｸ様式の建物(13世紀)であり、二階部分のﾌｧｻｰﾄﾞは左右がｱｰﾁ型に開いており、空がｱｰﾁの向こうに広がっている。

事例－９　広場下に駐車場を作ったために人の空間として確保された広場

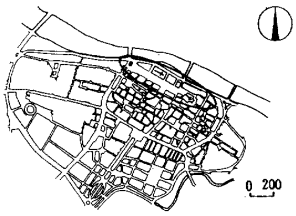
国： SPAIN　　**都市名：** ZARAGOZA

広場名： 1)PLAZA DE CESAR AUGUSTO　2)PLAZA DEL PILAR　3)PLAZA DE LA SEO

広場形態



都市図



写真

広場機能

教会前広場
市庁舎前広場
憩いの広場
地下駐車場

周辺建築

ピラル聖母教会
市庁舎
商品取引所
大司教館
大聖堂
(ﾀﾍﾞｽﾄﾘｰ美術館)
県庁
裁判所
バス停留所
商業施設

コメント

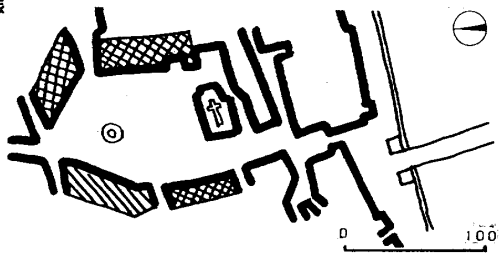
かつてはアラゴン王国の首都であったが、19世紀フランス軍の侵入により町は大きなダメージを受ける。現在の町は以降再建された比較的新しい町並みである。広場は北側のエブロ川に沿って全長300mを超える細長い形状で２つの大きな教会と行政施設が建ち並ぶ。以前は駐車場と植栽が広場の大部分を占めていたが、現在は地下駐車場が設けられ地上は歩行者の空間となっている。彫刻や水場など現代的なデザインが施されている広場である。

事例－10　都市計画の手法によって広場を人の空間として確保した事例

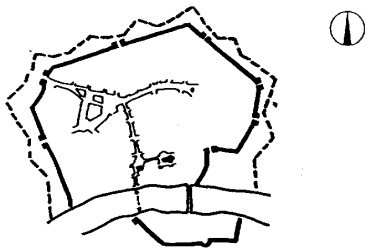
国：　GERMANY　　都市名：　FRANKFURT

広場名：　RÖMER

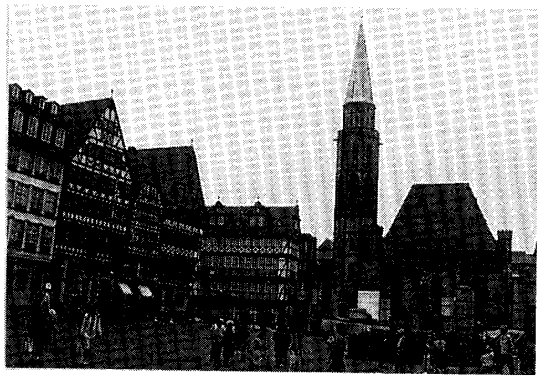
広場形態



都市図



写真



広場機能

市庁舎前広場
教会前広場

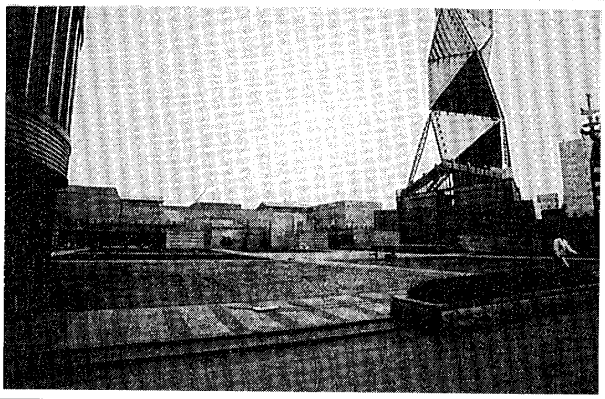
周辺建築

タウンホール
博物館
ニコライ教会
泉

コメント

中世の政治中心地
1980年代に市は全面的再建を目的にコンペに
着手し広場の改造を行った
広場の隣にドームがそびえている

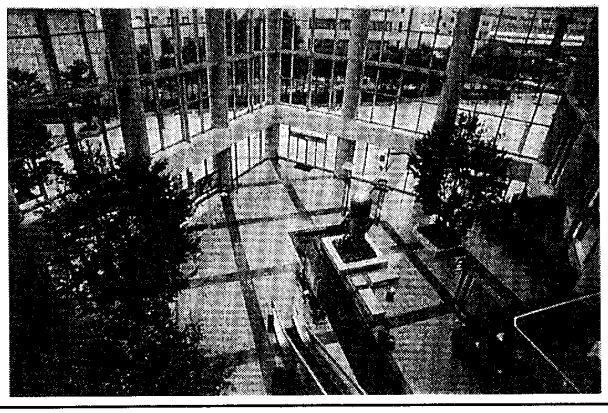
写真－8　敷地内に自由通行できる空間を取り入れた事例



水戸芸術館

都心地区に豊かなオープンスペースを確保し、各種イベントに対応すると同時に自由通行の出来る空間ともなっている。

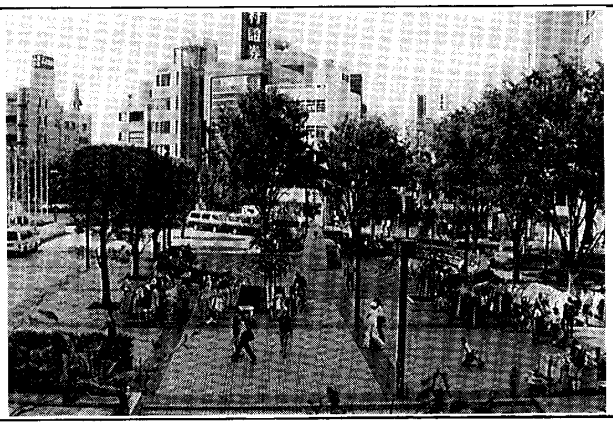
写真－9　アトリウム空間を開放していった事例



シーバンスのアトリウム空間

都心のオフィス空間の中に豊かなアトリウムを取り込んだ事例で、集客を目的とした施設を配置しながら、自由通行できる空間となっている。

写真－10　計画区域の中に歩行者空間としての広場を計画した事例



ソニックシティー附属鐘塚公園広場

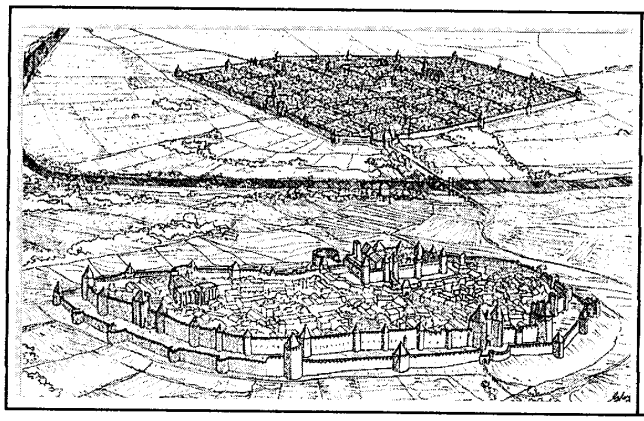
都心の大敷地の開発計画としてのソニックシティーに附属して公共的空間が広場として作られている。そこでは定期市が開かれる。

（8）階層性と都市の構成

（下町と山の手：旧市街と新市街：上と下の町：）

都市とは元々階層性の下に作られた対象であるといってもいいであろう。特に中世期に建設された都市であればなおさらである。この階層性が何らかの形で現代まで残され，都市の地区構成を司る要素として働いている場合もある。例えば，山の手と下町という言葉である。これは暗に都市に於ける支配者層と被支配者層の居住区として，あるいは，富めるものと貧しいものの領域として了解している言葉といえる。それは，中世期の都市と城の関係とも言えるものである。この場合の城は，町を囲う城ではなく，支配者層あるいは領主の居城としての城である。このように階層性に対応する要素は都市には何らかの形で存在する。現代の都市でも既存都市域と新開発地で異なった空間構成が見られるし，都心部と郊外部でその構成が異なる。このような空間の階層性として考えたときにそこに立地する都市広場についてもそれぞれの地区に立地するその地区の特性に合わせた広場空間が存在する場合があるし，計画していかなければならない。

写真－11　上の町と下の町



カルカッソンヌ（南フランス）

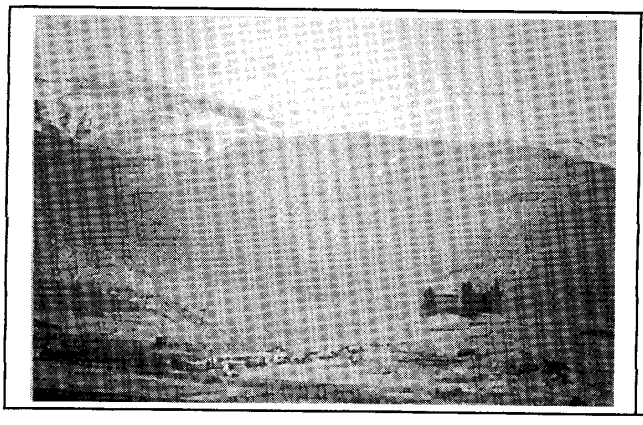
建設時期の違う二つの城塞都市が並置されている事例で、古い山の上の城塞は現在観光拠点となっているが、下の町は、現在でも生きた町なっている。

写真－12　穴蔵住居群と通常の都市

ガディス（スペイン）

スペインの通常の都市とジプシーが定住化したクエバスと呼ばれる穴蔵住居群の地区が隣接している。10000人の地下住居コミュニティーといわれている。

写真－13　下町と山の手



アルカラ（スペイン）

山の上には領主の居城があり、下の町を管理している風景を作っている。支配と被支配を図式化した構図がうかがわれる。

写真－14　旧市街と新市街：

カサブランカ（モロッコ）

カサブランカの旧市街は、現在の都市の中ではほんの一部となっているが、旧市街全体は商業空間化している。都市の主要な機能は全部新市街で果たしている。

（9）見えないシステムとしての管理

すでに車社会となってしまった日本の都市空間では，敷地の中に人間のための空間を確保せざるを得ない状況にある。最近は公共的な建築だけでなく，民間の商業施設の中にもパブリックスペースが設けられる例が多数見られる。近年これらのパブリックスペースも調査の対象として研究を始めている。

このパブリックスペース調査のため都内のある施設を訪れたとき，写真撮影をガードマンから注意されるということがあった。管理人室に氏名を届け出て，許可証をもらってほしいとのことだった。目に見えるものとしてはフェンスや金網があるわけではなく誰でも自由に入れる形の空間なのであるが，そこでの行為・利用者は目に見えないもの，つまり管理によって規制され，空間の使われ方は見えるものと異なるものになっていた。

このことから空間を管理の面から考えてみることも必要であると考えるようになった。

敷地内の空間であれば，何かしらの管理が加えられるというのは当然のことだが，一口に管理といってもその状況は均一ではなくていくつか段階があると考えられる。たとえば施設の開場時間のみ利用できるパブリックスペースもあれば，夜間でも通り抜けられる空間もある。写真撮影に許可が必要な空間もあれば，全く規制が無い場合もある。そこで，管理に関わる３つの要素をとりあげ，それぞれに条件や制限の有無を検討し，その組み合わせをパターン化した。以下にそのパターンと対応する事例を示す。

図－10

管理の要素	Open ◀	▶ Close
時間 Times	24時間開放されている	ある一定の時間のみの開放
人間　Man	不特定多数に開放されている	利用者に条件あり
行為　Action	どの様な行為も制限がない	行為の制限あり

ベクトル化

$$\begin{pmatrix} T \\ A \\ M \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}$$

Open= 0　　Close= 1　　としてパターンを考える

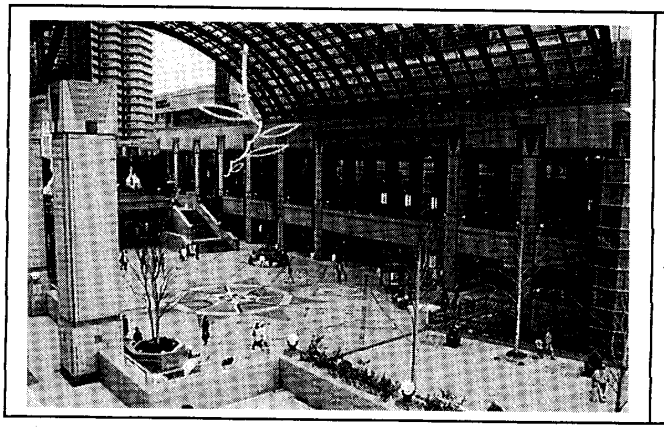
図－11

Level 1	Level 2			Level 3			Level 4
$\begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}$	$\begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$	$\begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}$	$\begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}$	$\begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}$	$\begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$	$\begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}$	$\begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}$

写真－15　横浜ランドマークタワー付近多目的広場（T,M,A）＝（0,0,0）Level 1

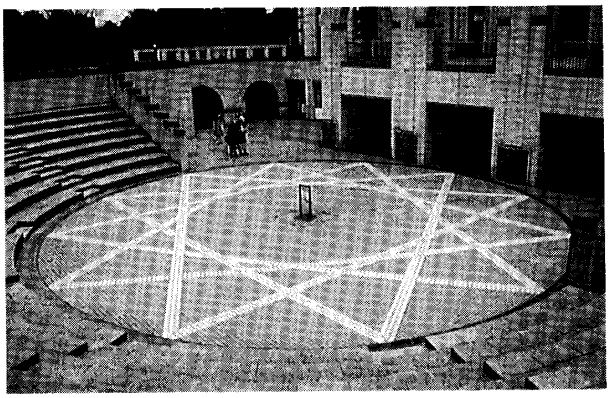
横浜みなとみらい２１地区のランドマークタワー足下にある多目的広場は２４時間誰でも通行が自由で、行為にも制約がない。写真撮影可、大道芸可。

写真－16　恵比寿ガーデンプレース　センター広場周辺（T,M,A）＝（0,0,1）Level 2



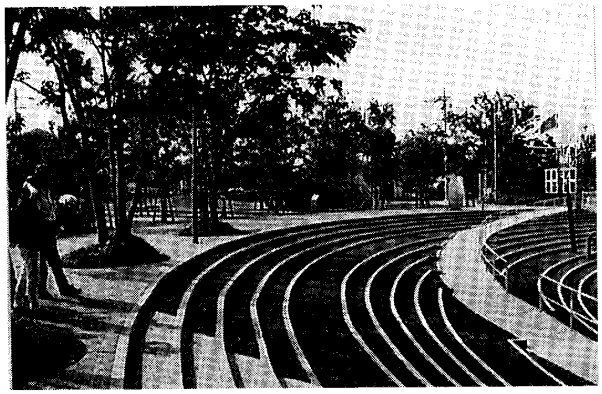
昼間はデパートや飲食店に訪れる人々で賑わう。敷地東側のホテルや住宅棟へ向かう人々は敷地内を通り抜けできる。センター広場では各種イベントが催される。一日中誰でも通過・滞留することはできるが、大道芸等そこでできない行為はある。

写真－17　西戸山タワーガーデン東京グローブ座＋プラザ（T,M,A）＝（0,1,1）Level 3



高層マンションの足下に設けられた広場で、劇場施設であるグローブ座と一体化した空地が設けられている。これらの広場には24時間進入することはできるが、居住者以外は管理室に届け出なければならない。またそこでの行為は限定されている。（写真を撮るには許可が必要）

写真－18　多摩六都科学館（T,M,A）＝（1,1,1）Level 4



多摩北部６都市が都の補助を受け共同整備・運営する科学館である。敷地は塀と門扉で囲われている。屋外空間は施設が開設されている時間は無料ではいることができるが、入口にはガードマンがいて、入場者を監視している。写真をとれるが大道芸はできない。

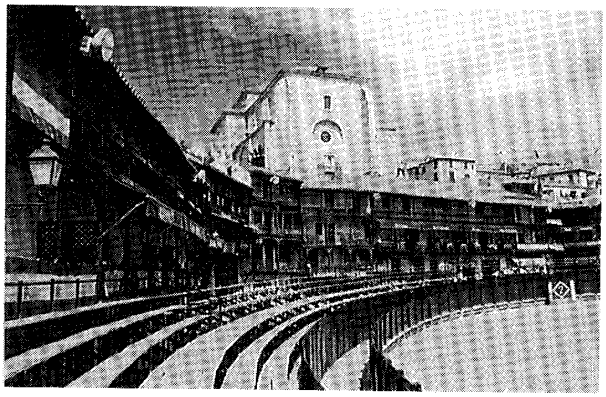
こうしたベクトル化が管理の問題を網羅しているかどうかは現段階では不明であるが，事例が該当することから，管理には段階があるのではないかと考えられる。今後どの様な方向でこの管理の問題を検討していけばよいのかを考えていくことのが課題である。

また海外の都市広場の場合は，通常行政が清掃や整備の管理を行っているものと考えられる。早朝清掃車が水をまきながら広場を往復している姿をよく見かける。基本的に私たちが研究の対象としている広場は公道の延長にあり，いつでも誰でも利用することができる。しかし，１週間や１年という単位で考えると，定期市や祭りのために通行止めがなされ，そこでの行為が限定されることもある。これも管理のひとつであると考えられ，その管理によって普段とは異なる空間がつくられていることになる。

スペインの多くの都市にはマヨール広場があり，夏から秋にかけての闘牛の季節になると，広場に仮設の観客席が設けられ，土が敷き詰められる。この闘牛のためのセットが組まれている数日間は，車両は通行止めになり広場は，祭りのためだけの場となる。

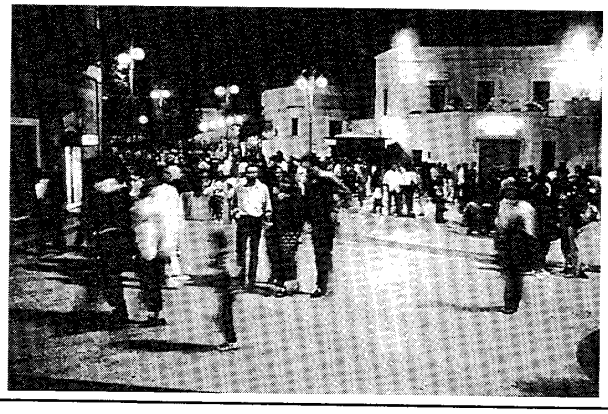
南イタリアのマテーラという町では，中心の広場と通りが日曜日の夜，歩行者天国として市民に開放される。市民は日曜日の夜，町の中心の通りと広場を行ったり来たりして親戚や友人とそこで出会い，しばらくおしゃべりしてまた歩く，そして別の友人とまた出会って話す，これを繰り返している。この通りには銀行やオフ

写真－19



チンチョン（スペイン）
マヨール広場は丘の上から見下ろせる位置にあり、円形の闘牛場が仮設で作られる。

写真－20



マテラ（イタリア）
サッシと呼ばれる穴蔵住居がある都市である。中心の広場は、穴蔵住居群のゾーンと新市街のゾーンが接するところにある。この写真は夜の風景である。

ィスが建ち並び，建物も現代的なものが多く，昼間は車が通る部分もある。おそらく行政が車両通行止めという方法でこの空間を管理することにより，昼と夜とで全く違った空間が生まれているのである。

これらのことから，海外の都市広場においても管理手法によって空間のもつ意味を変えることが出来ると考えられる。目に見えない事象であるがこの管理の問題を解明していくことは，今後の大きな課題である。

(10) 終わりに

都市とは多面的な対象である。これまでに記述した事項はその一部であるが，その一つ一つが重要な意味を持っており，それを追求していくことによって徐々にその対象を明確にしていけるであろう。8年かけた都市広場調査も，まだまだおおかたの地域を調査するところまでには至っていない。しかし，そろそろ，その全体像をつかむ努力をしていってよい段階ではないかと考えている。

今回のこの論はその意味で全体像に至る一つのステップと位置づけている。このステップを利用して何を考えればよいかを整理していく論として考えている。我が国の行政レベルで調査した結果であるが，「広場」とは制度として，整備概念として，あるいは都市計画上の用語として定義された対象とはなっていないようである。非常に曖昧な空間概念であるということを，今回行政へのアンケート調査（いずれ報告を行う予定）を実施してみて判ったことである。我が国にとって広場概念が扱い慣れない対象であることは，行政の立場ではっきり言えるようである。これでは，よい広場空間を計画していく

ことは無理であろう。まず，概念が多様であることを前提として対象を規定し，計画を積極的に行っていく体制を作っていくことが重要であろう。

引用文献

1. パブリックスペースの在り方に関する研究－東京23区内広場調査－，須賀麻実子，卒業論文1998
2. 都市形態とセンターの構造に関する形態学的研究，横田智美，修士論文1998

参考文献

1. 東欧都市広場についての考察－1990年東欧都市広場調査報告－，芦川智・鶴田佳子，昭和女子大学学苑生活美学紀要 平成３年７月，621号
2. 東欧都市広場形態の考察－1991年第２回海外都市広場調査報告－，芦川智・鶴田佳子・金子友美，昭和女子大学学苑生活美学紀要 平成４年７月，633号
3. トルコ・ギリシャ都市広場形態についての考察－1992年第３回海外都市広場調査報告－，　芦川智・鶴田佳子，昭和女子大学学苑生活美学紀要 平成５年７月，644号
4. 北欧・フランドル等都市広場形態についての考察－1993年第４回海外都市広場調査報告－，芦川智・金子友美，昭和女子大学学苑生活美学紀要 平成６年７月，655号
5. 都市広場の造形に関する研究－広場の形態的把握方法の提案について－，芦川智・鶴田佳子，昭和女子大学生活機構研究科紀要 1991年Vol.1
6. 都市のシンボル性に関する形態学的研究－都市のランドマークと都市広場の概念構成についてのケーススタディー－，芦川智・林田ゆみ子・鶴田佳子，昭和女子大学生活機構研究科紀要 1992年，Vol.2
7. 東欧都市広場の類型化－活動状況図の表現手法に関する基礎的考察－（その６），芦川智・金子友美・鶴田佳子，日本建築学会大会論文報告集 1992年８月
8. 東欧都市広場の類型化（その２）－活動状況図の表現手法に関する基礎的考察（その７），芦川智・鶴田佳子・金子友美，日本建築学会大会論文報告集 1993年９月
9. 東欧都市広場の類型化（その３）－活動状況図の表現手法に関する基礎的考察（その８），芦川智・金子友美・鶴田佳子
10. トルコ都市広場の類型化－活動状況図の表現手法に関する基礎的考察（その９）－，芦川智・鶴田佳子・小柴美海，日本建築学会大会論文報告集 1994年９月
11. 広場の類型化についての試案－活動状況図の表現手法に関する基礎的考察（その10）－，芦川智・金子友美，日本建築学会大会論文報告集 1994年9月
12. イエメンの都市と広場についての考察－1994～1995第５回海外都市広場調査報告－，芦川智，昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要 Vol.6，1997
13. 北イタリア都市広場形態についての考察－1994年第６回海外都市広場調査報告－，芦川智・金子友美，昭和女子大学学苑生活美学紀要 平成７年12月，671号
14. モロッコ・ポルトガル・スペイン都市広場形態についての考察－1995年第７回海外都市広場調査報告－，芦川智・金子友美・鶴田佳子・田中優香・横田智美，昭和女子大学学苑生活美学紀要 平成８年12月，683号
15. スペイン・ポルトガル・南フランス都市広場形態についての考察－1996年第８回海外都市広場調査報告－，芦川智・金子友美・鶴田佳子・横田智美・美馬陽子・横谷薫，昭和女子大学学苑生活美学紀要 平成９年７月，689号